

はな 花のころ

■ 楽曲データ

歌詞：井上浩志 作詞

楽曲：南荘宏 作曲

発表：浄土真宗本願寺派仏教音楽研究所 1979年

初演：—

初出：『花のころ』 浄土真宗本願寺派仏教音楽研究所 1980年

管理番号：M0045

■ 創作の経緯

仏教音楽研究所の第4回作曲募集（1979年度）入選作品のひとつ。《流れゆく雲に》とともに発表。

■ 校訂報告

校訂譜：『聖歌・讃歌集』第5巻収録

底資料：『花のころ』 浄土真宗本願寺派仏教音楽研究所 1980年

比較資料：—

校訂の詳細：特になし

■ 解説

仏教讃歌は、古くは明治期より「仏徳讃嘆」をその根幹として作られてきました。しかし一方で、特別な言葉は使わずとも、人の心に寄り添い、大いなる拠りどころとして大切に歌われてきたものも数多くあります。《花のころ》は、まさにそのような曲だといえるでしょう。

タイトルにもある「花」は、私たちの「いのち」を意味します。この曲は、その一つ一つのいのちのかけがえのなさを、今一度私たちに教えてくれているように思います。

◆ 作詞者・作曲者について

作詞の井上浩志（1928～）は、資料に乏しく、詩作を愛好されていた方だということしかわかっておりません。

作曲は、南荘宏（1955～）。本願寺派の僧侶で、親しみやすい仏教讃歌をいくつも書いています。

◆ 歌詞の内容について

詩において、「花」ほど繰り返し用いられてきた比喻はないかもしれません。詩に限らず、日常生活でも「花のように美しい」というふうに、私たちはこの言葉を何気なく使っているように思います。

「花」という言葉は、イメージを伝えやすくポジティブで気持ちのよいものですが、あまりに一般的なために、新鮮な感動をもたらしにくいところがあります。歌の場合は、特に音楽の雰囲気に流されがちですので、歌詞の本意がどこにあるのか、注意して読む必要があるでしょう。

この作品では例えば、冒頭2行が、とても繊細で独自の表現になっています。「寄り」の目線によって、作者はここから描写を敷衍していき、花になぞらえたさまざまな言葉で、私たちのあるべき姿を描きます。それは、控えめながら、毅然とした美しい姿であり、襟を正す厳しさをも感じさせます。

◆曲について

下の音域から八分音符で駆けあがるメロディーが、澄んだ風のように軽やかな余韻を残します。曲は、この上行する音形（譜面上ではシドミファソ）を軸にして進行します。メロディー自体は簡潔ながら、フレーズのまとまりは変則的で、幅広い音域を使って書かれているのが特徴です。作曲の南荘さんは、これらの要素をバランスよく取り混ぜ、曲全体を奥行きのあるものに仕上げました。

◆歌い方

①歌い出しは、9～11小節の各語頭に、は行が続きます。メロディーの流れに沿って音楽的に歌うことと、発音の明瞭さを両立することは容易ではありませんが、はじめが肝心ですのでよく練習してください。

②11小節目では、低い「シ」の音をレガート（なめらかに）でおさめるように歌います。

③11小節目3拍目と4拍目の間で、わずかにフレーズが切れます。4小節をひとつのまとまりにしようとすると、だらだらした印象になりますので、11小節目4拍目から次の小節を少し切り離すつもりで歌うといいでしょう。

⑤13小節目1拍目は、明るい声で響かせます。呼びかけるような気持ちで。

⑥13小節目4拍目～15小節目は、ひとまとまりになるように。歌の中心にくる、大切な部分です。

⑦17小節からは、19小節目の「レ」に向かって盛りあげます。19小節目は、長さや響きを充分にとりましょう。息継ぎのタイミングが早すぎないように。

⑧20・21小節目の繰り返しのフレーズは、難しい音程ですが、エネルギーを持続させてたっぷりとした表現をします。

◆楽譜・音源について

音源は、CD『響流十方』に収録されています。

楽譜については、二部合唱版が『讃歌集 二部合唱』第4巻に掲載されています。

解説執筆：石川紀久子（本願寺仏教音楽・儀礼研究所 [現・浄土真宗本願寺派総合研究所仏教音楽・儀礼研究室] 委託研究員）

※本解説は、「メロディーの宝石箱」No. 83（仏教婦人会総連盟機関誌『めぐみ』第210号収録）を加筆・修正のうえ、転載。

Copyright: Jodo Shinshu Hongwanji-ha Research Institute. All Rights Reserved.